

2013 年台風 26 号による伊豆大島ジオパークに対するジオパークネットワーク  
としての支援を行うための事前調査結果について（速報）

次のとおり報告します。

平成 25 年 10 月 22 日

伊豆半島ジオパーク推進協議会

事務局 鈴木 雄介

■現地状況

調査日程：10 月 20 日～21 日 10 月 20 日は、台風 27 号の影響による大雨警報をうけ、元町地区をはじめとして避難勧告が行われていたため、勧告地域外での調査やごく少人数へのヒアリングのみを行った。

21 日は、伊豆半島ジオパーク推進協議会長（伊東市長）の大島町長表敬に同行するとともに、被災地の状況確認も行った。



被害の大きかった地域の状況



スリット堰堤に捕捉された流木

#### ■JGN としての支援に関する提案

- ・現状を理解し、災害を学ぶ機会の提供

今回の災害は、透水性が良く洪水や土石流などの表流水にかかわる災害の少ない伊豆大島にとっては驚きであった。今回の災害で何が起こったのか、今後どのようなことになるのか、何に注意していけばよいのかなど、様々な報道が飛び交うなか、正確な知識を得る機会が少ない。

発災直後の土木学会等の緊急調査や、これから行われる調査・研究によって、さまざまな成果が得られる。このような調査の結果は、必ずしも地域住民に正しく伝達されないことも多く、中途半端で時に誤解されかねない報道でしか伝えられない。JGN としては、災害に対する正確な知識や自然との付き合い方について学ぶ機会を提供する必要がある。

災害の状況については簡単な調査しか行っていないが、既存の砂防施設が（十分ではないものの）効果を発揮している事例がいくつか確認された。実際に効果を発揮した防災施設に関する適切な評価を住民に伝えることは、防災対策の目的やその限界を知ることにつながる。

災害後に行われる情報提供は、災害の怖さや発生可能性といった話になってしまうことが多いが、今後も現地に住む方に対し、自然とうまく付き合うには、などの前向きな話題提供も含めたセミナーや、パンフレットなどの作成も行うことが望ましい。また、同種の土砂災害の経験がある他のジオパークとの交流も、双方に有効であろう。

#### ・ジオサイトの被災状況調査

伊豆大島の成り立ちを示すジオサイトは、一方で災害履歴を地域に伝えるためのツールでもある。今後の災害復旧工事などにより、できるだけジオサイトが失われないよう、サイトの被災状況調査や（被災していた場合の）復旧方法などについて提言を行うことも、JGNの役割として期待される。これらについては、学術組織と繋がりのあるJGCと連携して行うことが望ましい。

なお、この間の調査では、三原山に登る道路が被災しているほか、89の指定ジオサイト中20箇所を確認し、現時点ではサイトの保全状況はほぼ問題がなかった。（詳細別紙）

#### ・災害体験・教訓の共有

カルデラ壁の土砂災害で被災した阿蘇ジオパークや火山地域のジオパークは当然として、崩れやすい大地との共存は、日本のジオパークの共通課題である。時間雨量100mm前後の雨が4時間も継続した今回の雨は、伊豆大島にかかわらず、どの地域でも発生しうる災害誘因である。伊豆大島における災害の状況やそこで得られた教訓を、JGN内で共有しつつ、それぞれのジオパークを訪問した方にも伝える仕組み作りを行う必要がある。

まず、今回の現地調査を元に、写真と説明文などをセットにした各地のジオパークで展示するための伊豆大島の被害速報を作成し、JGNから各地に提供することが望ましいと考える。

今後現地の状況に十分配慮し、可能となった段階で、各ジオパークからガイドを含めて伊豆大島ジオパークを訪れたり、伊豆大島ジオパークから体験者を招くなどして、ネットワークを活かした相互交流の促進が望まれる。その際、三陸ジオパークや阿蘇ジオパークなどの被災体験者が、伊豆大島を訪れて相互交流を図ることが出来れば、ネットワークの意義がより高まるはずである。

#### ・災害を学ぶためのジオサイトの設定

伊豆大島では1958年狩野川台風時にも大金沢や長沢など、今回の災害が発生した溪流で土石流が生じ、18名の死者を出している。狩野川台風から55年、土砂災害の記憶は必ずしも地域に継承されていなかったようである。狩野川が流れ、狩野川台風による洪水で850名に及ぶ死者・行方不明者を出した伊豆半島においても同様の課題がある。

不明者捜索や緊急対策が行われている現時点で、災害遺構の選定等を行うことは困難であるが、地元の意向を尊重しながら、災害遺構候補や、その必要性について訴える必要がある。

被害の大きかった地区では、今回の土砂流によって、14世紀の元町溶岩に達するガリーが多数形成されていた。ガリーによって作られた露頭では、14世紀以降にこの地域に降った火山灰の地層のほか、複数枚の土砂流の痕跡も確認できた。土砂流堆積物の一部は、肉眼的には今回の土砂流で流出した砂礫とよく似たものであった。元町という伊豆大島主要部の土地の成り立ちを示すとともに、長期的な災害履歴を示す場所としてジオサイトに設定するなどの保全が行われることが望ましい。

応急復旧事業の後、本格復旧工事の設計などにあたって、関係機関や大島町、地元の住民たちが、防災対策とジオサイトになり得る場所を、どう保全するかなどの判断材料を、JGNの支援で早期から提供することも可能になる。



神達地区のガリーに現れた過去の土砂災害の痕跡

#### ・JGNにおける災害対応体制の強化

災害の形はさまざまではあるが、平常期、緊急対応期、復旧復興期等、災害の各段階においてJGNの災害対応方針について整理しておくことが望ましい。発災後に調査などを行う場合には、対応チームの編成や調査者のフォローや身分保障についてもJGNとして取り組むことでよりスムーズな災害対応が可能となる。



<参考情報>

■義援金

日本ジオパーク全国大会・隠岐大会期間中に起きた伊豆大島の台風 26 号による豪雨被害を受け、全国大会・隠岐大会参加者は大会最終日に「SAVE伊豆大島」と呼びかけ有志より義援金を募った。

10月21日に、この時に集められた義援金をお見舞金（7万440円）として、伊豆大島の川島理史町長に届けた。

川島町長は、お礼を述べるとともに被災状況を説明。次に発生している台風27号・28号への備えとして、高齢者などの島外避難などを検討していることも説明された。



ジオパーク全国大会参加者有志からの義援金を手渡す。

義援金が入った封筒とともに、全国大会での義援金募集状況の写真も手渡した。